

審査の結果の要旨

氏名 建部 恭宣

本論文は「京・近江及び丹後国における建築生産活動の展開に関する史的研究」と題されたもので、近世における、京・近江・丹後国における大工達の活動の実態を、主に実際の遺構の修理、調査を通して得られた資料をもとにして、明らかにしたものである。

本論文は、全体が7章で構成される。著者の視点は、建築を造る事に関わった大工を始とする各職人達の、仕事への情熱や姿勢、さらに営業というような一種の駆け引きを含む、様々な活動があった、ことに注目しており、これらの大工、職人達が日常にいかにか仕事を進めていたのか、人間味あふれる大工像を描くことが目標であるという。

第一章は、「京の大工「三上吉兵衛」の事績と近代化への対応」である。近世以来の大工であった京の大工「三上吉兵衛」家は、近代に入ると、様々な活動を新たに起こし対応した。幕末から明治・大正にかけて活躍するのは、四代目(吉右衛門)と、五代目(伊之助)である。特に吉右衛門は、明治13年(1880)頃に「京都府下大工組合会社」の設立に関わり、大工を結集して「組合」の名の元に共同請負を行うなど、旧態からの転換を図り近代的な組織作りを目指した。京都における建設業の発展と近代化を積極的に推進した中心人物として、重要な役割を果たした。

第二章は、「西教寺本堂造営と江州坂本大工「中嶋次郎左衛門」の仕事」である。大工中嶋次郎左右衛門は、享保15年(1730)12月に中井役所へ西教寺本堂の修理願を出した。修理という者の、実は新築再建であって、同時代の願と実態の乖離が伺われる。西教寺本堂の解体修理においては、大工の出面を記した板が発見されて、大工らの仕事の実態の一部が明らかになった。

第三章は、「丹後地方における大工の活動と宮津葛屋町の大工達」である。史料は主として棟札を用い、丹後地方において活動した大工の出身地と、中心となった富田氏の宮津における集住形態を明らかにした。

第四章は、「宮津の大工「富田」氏の活動とその意義」である。当地方でもっとも多く仕事をこなした富田氏の活動を追跡した。主として棟札を史料とする。近世後期においては、プロデューサーもしくは総合請負者としての性格さえ色濃くもったことが明らかにされた。

第五章は、「智恩寺山門再建と大工の就労状況」である。京都府下宮津市の智恩寺山門再建の出面板を主とした史料とする。これには、宝暦12年(1762)9月から明和4年9月の上棟まで60ヶ月に亘る大工の就労状況が記録されている。大工の就業実態の克明に判る史料である。多数の大工関わったが、本棟梁の就労工数が最も多く、しかも長期間連続して就労した。相棟梁は、数人の助工と共に中核となって良く本棟梁を補佐していた。

第六章は、「田辺藩における大工の活動状況と構成」である。丹後国田辺城下居住の大工達の活動状況の分析を行っている。当時の町大工は67人で、技量によって上・中・下の3段階に分けられていた。8割強が「上」大工であり、「中」「下」と書かれた大工は修業中の大工と解釈される。大工の3割弱が引土町に集住しており、大工町の様相を示していた。

第七章は、「田辺藩における藩士の住居とその仕様」である。瀬尾家に伝来する嘉永5年(1852)の史料に、藩士住居の図がある。そこにおける大工の居住の実態を明らかにした。大きさは、35.25坪の「中井御屋舗」から御徒士の住む8坪の「二間御長家」までで、地位によって規模や仕様が定められていた。同時に書き込みにより、以下のような実態が知られる。木材について、貫・垂木・板以外は殆ど丸太として長さや末口径が表示され、そこから木取りしたことが知られる。建具や金物及び瓦・石材・雑材料など各用材の寸法や数量等も書かれている。建築各部の歩掛りも記され、屋根材の違いによる坪当たりの大工工数は、草葺き家は7.5人、板葺き家は8人、瓦葺きの家は8.5人であった。天井張り手間は八畳当たりの人工数で記され、敷鴨居の製作手間や建具の種別による人工数等も知ることができる。貫や垂木・敷居等の大きさや等級による値段の記述も見られ、田辺城下では規格寸法の材木がある程度流通していたことが想定される。

本論文は、従来近世の大工の活動が、中井役所など公儀の仕事を中心に研究されてきたのに対し、地方における実態を明かにした事に大きな特徴がある。史料としては、棟札、解体修理などで発見された出面板など、現地でなくては採取できない、しかも建築史特有の情報を得ることの出来るものを大きく使用していることに特徴がある。特に現場での就労実態が克明に判明する新出資料を丁寧に分析して、現場での大工、諸職人の活動実態を明らかにしている点は特筆される。

よって、本論文は博士(工学)の学位請求論文として合格と認められる。